（書　　評）

『あなたの介護は誰がする？　介護職員が育つ社会を』〈川口 啓子著　クリエイツかもがわ〉

小田 史*

介護が必要になる状況はいつでも、誰にでも起こりうる。しかしながら、それを自分事として捉えている人がどれくらいいるだろうか。

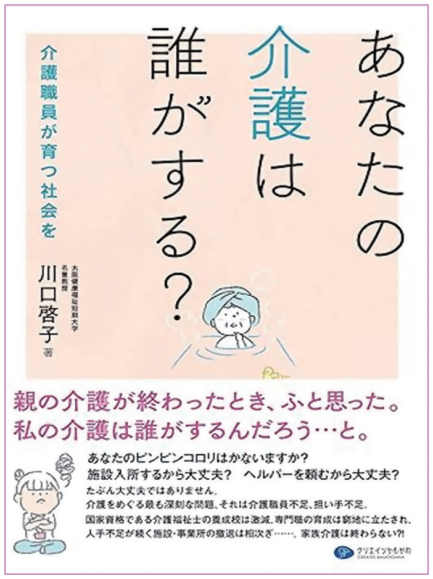
著者は、よく「介護については素人」とは言うものの、「介護」という言葉がようやく世間に知られ始めた頃から介護に直面し、介護をすること、介護を受けるということをリアルに体感している。20歳すぎで50代の実母が若年性アルツハイマー型認知症になり、介護体験を経てたどり着いた答えが「介護は愛情より根性より知識」という言葉。知識があるからこそ、愛情という重荷を下ろし、根性という無理を防ぐことができる。愛情に縛られ、根性で頑張り、やがて疲れ果てて、虐待や介護殺人という家族崩壊が発生する。「要介護になったら迷惑がかかる」高齢者の大多数がそう思わざるを得ない状況を生んでいるのは「介護」が家族任せになっていることが背景にある。著者は「要介護者は中途障害者、障害者を迷惑と言うのと同じ」とし、人権意識のアップデートが不可欠であると述べている。

介護を権利として行使することや、介護を受ける利用者が主体となること、これは「介護」において原則的な考え方なのだが、現実的にはそうなり得ていない。その溝をいかに埋めるか、これを解くヒントは、本書で著者が軸としている「介護職員が育つ社会づくり」、「介護を知って、介護に備える」の２点にあると考えている。

著者には、介護福祉士養成校での勤務と社会福祉法人の理事職の経験がある。「介護職員が育つ社会づくり」では、介護福祉士養成校の置かれている現状、福祉施設の職員研修制度や職場づくりの課題にも触れながら、介護職員が育つことが介護の質に直結すること、それらは安心して暮らし続けられる地域社会に還元されるものであることを述べている。

また「介護を受ける側が、介護のことを知って準備をしておく」では、素人でもシンプルでわかりやすく、ケアの要素を盛り込んだ「10の基本ケア」を紹介している。10の基本ケアは、【尊厳を護る・自立を支援する・在宅を支援する】という 3 つの大切な柱と生活の土台を整える日常生活動作の維持、人や地域とつながる社会性の維持、最期の時まで自分らしく生きる権利の実現、これらを可能にする10のケアスキルをまとめたものである。介護の本質は要介護者の尊厳を護り、その人らしい暮らしを支えることにあり、介護をする側も受ける側も、その実現に向けてともに歩む意識が必要である。受ける側は、受け身のまま介護を受ける状態から、受けたい介護を主張できる状態に変化させていかなくてはならない。

「あなたの介護は誰がする？」この問いは、漠然とした不安をあおるものではなく、自分事として「介護職員が育つ社会づくり」、「介護を知って、介護に備える」その事の必要性を説く著者からのメッセージである。



*大阪健康福祉短期大学　付属福祉実践研究センター